

SRID キャリア開発

第一回 国際開発分野で働く女性のためのオンラインシリーズ

国際開発研究者協会 (SRID: Society of Researchers for International Development) は、国際開発関連機関（国際機関、政府関係機関、NGOs、開発コンサルタント企業等）で働く事を希望する人達のキャリア開発を支援するため、カウンセリング、能力開発・向上研修等の**キャリア開発事業**を実施しています。その一環として、キャリア開発事業受講生や国際開発関連機関への就職を目指す人達にキャリア開発に関する情報を提供するため、『SRID キャリア開発』を年2回のペースで配信しています。世界銀行(WB)、アジア開発銀行 (ADB)、国連機関、国際協力機構 (JICA) 等の国際開発関連機関に勤務経験のある SRID 会員の知見とネットワークを活かし、SRID ならではの情報を発信しています。第2号では、国際開発分野で働く女性のキャリアに関する特集を組みました。

「国際開発分野で働く女性のためのオンライン・フォーラム」開催報告

SRID キャリア開発の新規事業として、2021年11月に「第一回国際開発分野で働く女性のためのオンライン・フォーラム」を ZOOM 方式で開催しました。一般的に「ジェンダーと開発」というテーマは、最近よく研究分野や国連等の国際機関、非営利団体の活動などに反映されるようになりました。しかし、それに比べて開発分野で活躍するにあたり女性が直面するいくつかの課題を話し合い、相談ができる場は殆ど存在しません。そこでこういった課題に焦点を当てたオンライン・フォーラムを実施することになりました。

現役の国連職員（池田 SRID 会員）と元国連職員（森田 SRID 会員・玉内氏）の合計3名の講師陣のパネル形式

で行いました。遠慮なく質疑応答、意見交換するために女性限定参加としました。テーマとして、1) 国際開発キャリアと私生活の両立について；2) 異文化での女性の立場の違い；3) パワハラ・セクハラの対処法；4) 女性が途上国に行く場合の心得・仕事以外の準備などに焦点を当てました。反響は予想を超え、数日で100名を超える参加希望がありました。政府機関、国連機関、民間、NGO、学生など様々な方々からの応募があり、関心のある課題も色々出てきました。その意見を整理すると大体3つの分野に分かれました。一番多かったのはワーク・ライフ・バランスの問題、特に子育てとの両立でした。さらにパートナーとの仕事の調整、遠距離恋愛・遠距離結婚などについての課題が挙げられました。

ワーク・ライフ・バランスの中でも出産のタイミングや育児をどうするか悩みが一番多く、産休・育休後の復帰などの悩みが次に続きました。そして途上国、あるいは文化的に女性の立場が違う国で女性が直面する問題の対処の仕方などの課題に興味がある事が分かりました。

話はまず全体像から入り、世界女性地位ランキングでいかに日本女性の地位が低いか、国際機関での日本人の比率や男女差などを統計で示しました。国際キャリア構築の上で人生デザインを考慮する必要性や、ワーク・ライフ・ブレンドという考え方に沿って、仕事上の満足度は人生の満足度とのバランスをとることが大事だということが強調されました。



またそれぞれの経験についても触れながら、同居型・別居型のパートナーの形態、出産や子育ての場所・タイミングの選択についても話し合いました。さらに遠距離恋愛・遠距離結婚についての経験やアドバイス、中東の赴任地などでの幾つかの体験を通じて、女性が異文化の赴任地に行く際の心得、セクハラやパワハラへの対処の仕方などについて、具体的なアドバイスがなされました。ワーキング・マザーとして必然的に求められるマルチタスクとして、キャリア上のスキルに必要な要素の共通点： 決断力、管理（危機管理も含め）能力、コミュニケーション力、ネットワーキングと工夫する能力が必然的に備わることなどについても議論されました。 又途上国に子連れで行った際のメリットなどについても話題になりました。



参加者からはイベント中、及びその後の感想として、リアルな話題をざっくばらんに意見交換したことが評価されました。キャリアの話はどうしても仕事中心になりますが、女性にとっては恋愛、結婚、出産、育児や介護など避けて通れない人生の課題、又ハラスメント対策など、なかなか取り上げにくい話題も今後扱って欲しいとの要望がありました。また、今回取り上げたテーマに加えて女性のキャリア形成・昇進問題などについてもいくつか提案がありました。 次回はテーマごとに分科会に分かれて話し合える、参加者との意見交換の場を作って欲しいという意見がありました。

森田宏子
キャリア開発事業運営委員

日本人国際機関職員のインタビュー

キャリア初期の JICA、国連等の開発機関への就職活動の不成功にもめげず、教員として勤務しながら、日本の大学の博士課程に通うなど、現実的な最善の選択肢を選び努力を積み重ね、世界銀行の教育専門家になられた荘所さん。現在はアフリカの最貧国の現場で活躍されています。ワーク・ライフ・バランスの課題も含



森田宏子

35年間の国連キャリアがあり、UNDP ハイチ事務所、開発のための科学技術センター、DESA にて地域開発、小島嶼国問題、SDGs を含めた持続可能な開発に関わる。国連本部で日本人職員間のワーキング・マザー会を立ち上げた。現在は ICU の外交・国際公務員養成プログラムのアドバイザーを務めながら同大学及び上智大学で非常勤講師を務める

め、どのようにキャリアを築いてこられたのか伺いました。

国際協力の経済学修士、中学校教諭、マラウィでプロジェクトおよび研究調査、国際学（教育）の博士号取得、世銀の本部勤務を経て、シエラ・レオネ事務所での現場の仕事に従事されています。すごく戦略的かつダイナミックなキャリアを積み重ねていますね。

若い頃は特にどんな職業に就こうという明確な夢や目標があったわけではありません。海外や語学に興味があったので、大学でポルトガル語を専攻し、アルバイトで貯めたお金でバックパッカーとして世界中を旅し、また在学中に一年休学しロータリー財団の奨学生としてブラジル（リオ・デ・ジャネイロ）へ留学しました。そこでストリート・チルドレンや貧富の差を目の当たりにして貧困のメカニズムを学びたいと考えようになりました。大学院では開発経済学を専攻し、ラテン・アメリカの開発経済に関する修士論文を書きました。大学院修了後、JICA、国連等の開発機関への就職を試みましたが採用に至らず、民間企業から内定をもらいましたが、開発でない分野の仕事をしていくという心の切り替えが出来ませんでした。教員採用試験に運よく合格したこともあり、これなら子供たちに開発途上国について知ってもらう活動もでき、同時に働きながら博士課程に進学もできると考え、中学校教諭の道を選びました。しかし、実際両立は大変で、2年後に大学院の勉強に集中することにしました。博士課程で世銀の教育専門家であった指導教授と出会ったこと、また日本の教育現場の経験を今後の進路に



インドの教員研修プログラムの視察

活かしたいと思い、教育開発の専門家になることを決めました。博士課程が終わる少し前にアメリカで開催された学会で指導教授の紹介で、世銀（当時世銀の中にあつたEFA-FTI ファースト・トラック・イニシアティブ、現Global Partnership for Education）職員と話す機会に恵まれました。日本に帰国後「インターンをさせてほしい」とメールでアピールし、運よく非正規のインターンとして受け入れてもらえました。博士課程修了間近だったので1カ月半のインターン中に世銀内で就職活動をし（世銀には大学院修士課程、博士課程の学生を対象とした正規の有給インターシップがあるが、私の場合は非正規なので無給）、人間開発局のコンサルタントの仕事（調査研究）をもらいました。その後南アジア地域局でコンサルタントとしてスリランカ、モルジブ、インド、アフガニスタン、ネパールのプロジェクトや研究に従事した後、教育専門官として採用されました。トータルで10年間世銀本部（人的開発局、南アジア地域局、アフリカ地域局）で勤務した後、世銀のキャリアを積むうえで大切な、

現地事務所の仕事をすることにしました。2019年に上司から誘いのあつたシエラレオネ事務所に異動して今に至ります。これまでキャリアを積んでいく中で色々苦労はありましたが、その時点で可能な選択肢から、最善なものを選んできました。また、周囲の人の支えも大きく、進路で悩んだ時は、大学院の指導教官、世銀の上司、友人等、様々な人にアドバイスをもらいながらここまでやってこられました。

荘所さんはアフリカの最貧国の現場で働かれています。現場で仕事する時はどんなことを心掛けていますか？

常にその国の置かれている現状を考慮し、どんな政策理論が適切なのかを考え、政策策定やプロジェクトのデザインに反映させるようにしています。さらに、クライアントである途上国政府がどのような教育政策を実施したいのか、受益者がどのような教育環境を求めているのかを聞き取り、出来る限りそれをサポートするというスタンスで仕事をしています。途上国政府や教育現場の要望に沿いながら、グローバル・ガバナンスや世銀本部との調整を行い、双方をハッピーにできるように努めています。なかなか大変です。

絶対的貧困層の多くが女性で、絶対的貧困の撲滅には、教育機会に恵まれていない、女性に教育機会を与えることが重要と言われています。女性の教育専門家として、女性だからこそ持てる視点や発想はありますか？

残念ながらシエラレオネには女性差別や偏見がまだ根深く残っています。例えば、女子より男子の教育を

優先させる傾向があります。また、つい最近まで10年間女子生徒が妊娠すると強制退学になる制度がありました。男性教員や教育大臣達も、「妊娠した女子生徒が学校にいと、他の女子生徒も妊娠するからだ」と大真面目に公言しているぐらいです。妊娠させた男性側には全くお咎めなしです。さらに、女子の性器切除、早期結婚の問題もあります。こういうセンシティブな問題は、男性相手に話しにくいこともあるため、私が女性であるから話してくれることはあると思います。このような女性に不利な状況を改善するために、私は、他のドナーと協働で、新任の教育大臣に「妊娠した生徒も学ぶ権利がある」、「女子教育を支援することは、国にとっても様々な便益がある」、「この悪しき制度が続く以上我々はシエラレオネの教育を支援しない」と説明し、結果的にこの制度は撤廃になりました。男性職員でも同じような対応をしたと思いますが、女性職員が担当すると、政府との折衝においても、熱意の伝わり方が違うのではないのでしょうか。

SRIDが国際開発分野で働く女性のためのフォーラムを開催したのですが、参加者の多くが、ワーク・ライフ・バランスをどうとっていくかについて、苦労していることが分かりました。フィールドを経験されている、荘所さんとしてもこの点、色々ご苦労される事も多いと思いますが、率直なご意見を聞かせていただけますか？

私にとって、ワーク・ライフ・バランスは今でも大きな課題です。国際機関等の開発業界で働くためには、高度な専門性と学歴（修士号以上）と途上国での経験

を含めた実務経験が必要となるので、キャリアを確立するまでに、かなりの時間がかかります。卒業後すぐに日本で働きだした人の中には、結婚、出産、管理職への昇進等、キャリアと生活基盤が早い段階で安定する人も多く出てきますが、それに比べると、国際機関のキャリア・パスには明確な青写真もなく、安定したキャリアを形成するためには、その分仕事を頑張らなければならず、プライベートを充実させることも難しくなりがちです。また、仮にある程度安定したポジションを確保できたとしても、国際機関では3-5年のサイクルで世界のあちこちにあるポストに移動しなければならないので、ずっと安泰が続く訳ではありません。その為か、国際機関の女性職員は、晩婚や離婚（これは男性職員も同じですが）が多いような気がします。パートナーと自分のキャリア、家族の生活をどう調整していくのか難しい問題です。

女性のワーク・ライフ・バランスの大きな課題のひとつがパートナー探しと子育てです。将来家族を持ちたいと考えている人は、国際機関という特殊な環境での女性のキャリア形成に理解のあるパートナーを見つけることです。お互いのキャリアや夢、家族の在り方とその実現方法をよく話し合うことだと思います。また将来子供を持ちたいと考えている人は、女性には妊娠適齢期があるので、どのタイミングで子供を産み育てるかは可能であれば計画的に考えておくと思います。もちろんこれが非常に難しいことは、私も身をもって体感していますが、例えば、早く産んでしまっ、手がかからなくなる年齢まで早く育てるオプションや、子どもが小さいうちは、ナニーを手軽に

雇うことができる途上国のポジションを探して育児と仕事との両立を図るという方法もあります。さらに、卵子凍結している人、養子縁組で子どもを家族に迎えている人もたくさんいます。

ただし、「女性だから結婚して、子どもを産む、育てるべきだ」という固定観念に縛られる必要はないことを最後に申し添えておきます。国際機関で働く女性のライフスタイルは多様で、それを尊重してくれるのも国際機関の良いところです。

最後に、国際機関を目指す人達へのメッセージをお願いします。

まず自分が何をしたいのかを明確にしてください。具体的には、何に興味があるか、何を自分の専門分野にしたいのか、日本や世界のどのような組織で仕事をしたいのかをよく考えてください。次に、それを実現するために現実的に何をすべきかを考えてください。具体的には何を勉強し、どこでどんな実務経験を積むかです。全てが自分の考えている様に行くわけではありませんから、その都度試行錯誤しながら、最適な選択肢を選び、次の選択肢を待つなり、切り拓くなりしな

がら、自分のキャリアを調整、修正していくといいと思います。あとネットワークや情報収集も大事なので、国際機関関連のセミナー、勉強会に参加したり、色々なメイリング・リストに登録したりしてネットワークを広げていくことも大事です（SRIDもそうですし、国連フォーラムや DC 開発フォーラムなどもあります）。

日本人は国際機関で働くのは不利だとよく言われます。理由としては、英語が母国語ではないこと、アグレッシブさに欠け自分の考えや主張をうまく伝えられない等が挙げられます（SRID キャリア開発第一号の関本氏のインタビュー記事参照）。しかし、日本人は一般的に、チームワークがうまい、周りを見ながら適切な発言・判断ができる、相手の立場や意見を尊重しながら謙虚な姿勢で仕事をする（これが途上国政府との交渉時には重要になってきます）、有言実行できる、締め切りを守るなどの強みを持っています。日本人の弱点を克服しながら（完全にネイティブにはなれませんが、上手に話せる努力はできます）、強みを伸ばしていけば、国際機関でも十分やっていけると強く信じています。私の尊敬する日本人の先輩たちはみんなそういう人達です。



庄所真理（しょうじょまり）世界銀行アフリカ局上級教育専門官
大阪外国語大学（現大阪大学）ポルトガル語科卒（途中ロータリー財団奨学生としてブラジルに1年留学）。神戸大学大学院国際協力研究科経済学修士取得後、中学校教諭として勤務。その後コンサルタントとしてJICAの教育プロジェクトや調査に携わる。マラウィ大学教育研究訓練センター客員研究員を経て神戸大学大学院より博士号取得。2009年世界銀行入行。世界銀行人間開発局、南アジア地域局勤務後、現在はアフリカ地域局シエラレオネ事務所で同国およびサントメ・プリンシペの教育案件、調査研究、政策アドバイスを担当。

ワーク・ライフ・バランスに関する一言アドバイス

SRID 会員からのワーク・ライフ・バランスに関する一言アドバイスです。

- 「私の『共働き』時代は、家事は原則として（勝手に外で働く）妻が担うか、妻の母親が支援するのが当たり前でした。母も私も疲れ切ってしまう、やむなくヘルパーを雇いましたが、良いヘルパーに巡り合えたことが人生最大の幸運でした。」 山下道子
- 「仕事や勉強、研究など、自分がやりたいこと、やると決めたことを諦めないで。いまそこにある現実を前向きに受け止めて。」 中野恭子
- 「私が経験から学んだことはどちらも犠牲にすることなく、完璧を目指す必要もないということ。健康と家族に勝るものはなく、仕事も育児を含めた家事も周りとのチームワーク、ネットワークを大切に、臨機応変に柔軟にベストを尽くせばいいのではないのでしょうか。趣味もリタイアしてから始めるのではなく、どんなに忙しくても自分の時間を確保することは、仕事や家庭にも良い影響をもたらすようです。」 森田宏子
- 「長い人生には様々なセット・バックがあります。そんな時は、変えられない過去を振り返って悔やむのではなく、現在から始まる未来を前向きに作っていくことに全力を尽くしましょう。」 小林文彦

➤ 「大いに反省していることですが、プロジェクトの役員会上程、本の出版、大きな国際会議の開催、昇進審査、海外事務所勤務等重要なキャリア・ステップとタイミングについて家族とよく相談しておくべきでした。」 鈴木博明

ツールボックス

Native から学べる無料の外国語学習 App

[SRID キャリア開発第1号](#)で、英文校閲のソフトを紹介しましたが、第2号ではネイティブから外国語の生きた表現を学び、仕事やプライベートで外国語（113言語）を使いこなせるようになるための無料App サービス、HiNative を紹介します。HiNative を通じて複数のネイティブに気軽に表現、発言等に関する質問ができて、無料で答えてもらえます。辞書を引いても分からない、ネイティブの「リアルな外国語」の「ニュアンス」を理解し「生きた表現」を学ぶことができます。Premium Version を購入すれば、より良いサービスが受けられますが、無料版でも、十分役に立ちます。HiNative は次のような人におすすめします。

- 海外留学せず、日本で外国語を勉強したい。
- 出張等で外国語を使い仕事はできるが、日本在住で、ネイティブと接する機会が少なく表現や発音が、ネイティブにも理解してもらえない「リアルな外国語」かどうか自信がない。

- 日本で外国語を勉強した後、現在は、海外の外国語圏で外国語を使い仕事はできているが、もっと外国語力を磨きたい。
- 英語には自信があるが、キャリアアップのため、フランス語、スペイン語、中国語等を学び、英語圏以外の国でも働いてみたい。

私は、アメリカに36年住んでいるので、仕事でも日常生活でも、自分では英語はなんとかこなしていると思っています。しかし、こちらで生まれたアメリカ国籍を持つ子供に時々表現や発音を直されます。また、世銀勤務時代、職場では自分の英語が同僚に通じていたのですが、野球の観戦に行きホットドックを注文した時に、お店のおばさんから、何度も聞き直されショックを受けた経験もあります。国際機関では、英語が公用語となっています。しかし、アメリカ、イギリス、オーストラリア、香港、シンガポール、インドの職員がしゃべる英語はみな違います。ましてや、日本、中国、フランス、スペイン人等 Nonnative な職員の使う英語は、子供時代にアメリカやイギリスに長く住んだ人を除けば、発音やアクセント等が母国語の影響を受けず、表現も必ずしも、Native の使う自然な表現でないこともあります。国際機関はそのような環境にあるので、Native である英語圏から来た職員も、Nonnative の話す英語に慣れていません。したがって、ある意味で、国際機関は Nonnative の英語表現（特に発音）については、比較的寛容な所であると言えます。だからと言って、英語力の向上に努めないと、「Mr. XX は、仕事は出来るが、英語はいまいちだね。」などという好ましくない人事評価を受けてしまうこともあり

まず、英語で仕事ができる様になっても、Native でない人は、このような App を使って、常に英語力の向上に努めることをお勧めします。(鈴木博明記)

ご案内

SRID キャリア開発カウンセリング

SRID では、留学準備、進路相談、国際機関への応募方法 CV の書き方、インタビューの受け方、要求される能力、採用後のキャリア開発について助言する等のカウンセリングを無料で行っています。大学生や高校生の方で、将来開発途上国の貧困解消や地球温暖化対策等の世界的課題の解決に貢献したいと漠然と思っているが、そのためにはどんな職業の選択肢があるのかを知りたい方も歓迎いたします。SRID ホームページにある、[SRID キャリア開発事業申請書](#)にご記入の上お申し込み下さい。

国際開発関連機関のキャリア関連情報

採用、セミナー、研修、履歴書の書き方、面接の受け方等の有益な情報が財務省、外務省国際機関人事センター、各国際機関等のどのウェブサイトに掲載されているかを整理した、[国際開発関連機関のキャリア関連情報](#)を SRID の Home Page で提供しています。どうぞ活用ください。

入会のお誘い SRID では新会員を募集しています。興味のある方は「[入会のお誘い](#)」をご覧ください

編集後記

世銀に入行したばかりの頃、初めてのプロジェクトが役員会で承認されたので、頑張ってくれたアフリカ人の女性のセクレタリー（今ではチームアシスタントというタイトルに代わりました）をランチに招待しましたが、招待には応じてくれませんでした。日本の職場でも、仕事でお世話になった人達を感謝の意を込め、よくランチに誘っていたので、どうして、彼女が招待に応じてくれないのかがよく分かりませんでした。その謎は、世銀が使っているカレンダーを見ている時に解けました。一年に一度セクレタリーデー（現在は Administrative Professionals Day と呼ばれています）という日があり、その日に上司は日頃のお礼を込め、セクレタリーに花を送ったりランチに招待したりすることになっていることが分かりました。

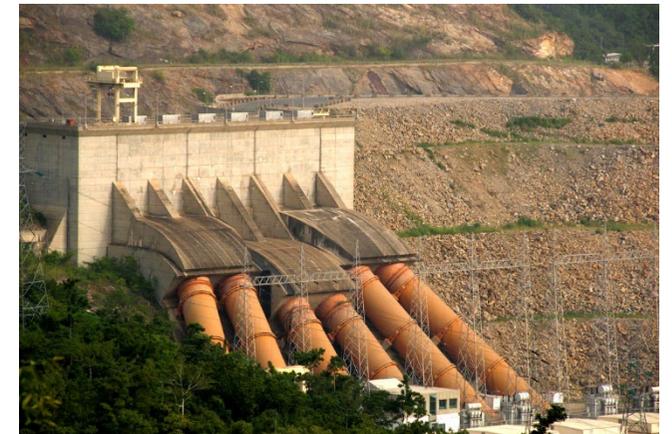
セクレタリーデー以外の日に、セクレタリーをランチに誘うことは、相手に不必要な心理的な負担を与える行為となるようです。セクレタリーデーは半年先であったので、プロジェクトのチームメンバーとピザパーティーを開き、彼女にも参加してもらいました。あまりよく考えず、日本の職場の習慣を国際機関に持ち込むと、このような失敗をすることもあります。

違う文化を持つ 170 以上の国からの職員（世銀では男女構成はほぼ均等と思われる）が働く国際機関では、このようなルールには大きな意味があります。SRID キャリア開発事業では、開発分野で働く女性のフォーラ

ムを開催し、女性ならではのキャリア形成上の問題を参加者と一緒に考える企画を行っています。女性会員が担当する、女性限定の企画ですが、男性もしっかり、問題の根源を理解しその解決に努力しなければならないと思っています。(鈴木博明記)



中国柳州市下水処理場（鈴木博明）



ガーナ水力発電施設（世界銀行）